

令和 6 年 5 月 18 日現在

機関番号：34522

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12444

研究課題名(和文) ウエルネス概念からみたアルザス地方のガストロノミーウォーキングに関する研究

研究課題名(英文) A Study on Gastronomy Walking in the Alsace Region from the Viewpoint of Wellness

研究代表者

西村 典芳 (NISHIMURA, Noriyoshi)

流通科学大学・人間社会学部・教授

研究者番号：10636351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ガストロノミーツーリズムは、食べるだけでなく料理法や食材生産の場までも幅広く対象とする観光であり、農山漁村の活性化に有効な手段となりうる。筆者らは、ウエルネスの視点からガストロノミーウォーキングによる地域活性化の可能性に注目し、フランスのアルザス州バール村と鳥取県湯梨浜町のガストロノミーウォーキングイベントについて調査を行った。その結果、参加者は、仲間・家族との交流を深めることが参加の動機であり、飲食と景観を参加者同士の交流を促進する要素として評価していることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の現地調査と分析から、日本の農山漁村地域においてガストロノミーウォーキングを通じた観光地域づくりを進めるうえで注意すべき視点を見出すことができた。どちらの事例でも、イベントの舞台となった地域の自然や景観に対する満足度は高かった。ガストロノミーウォーキングでは、歩くことは単なる健康のための運動ではなく、地域の魅力に触れ、豊かな食を生み出す風土を楽しむことに価値がある。したがって、イベントで提供する食事にこだわるだけでなく、日ごろから地域の景観づくりに力を入れることが大切である。また、地域活性化につなげるためには、一部の住民団体だけではなく、地域全体を巻き込んだ協力体制が必要である。

研究成果の概要(英文)：Gastronomy tourism is a comprehensive tourism activity with various and wide opened subjects from eating to a way of cooking or a place of production of foods, therefore it could be an effective method for revitalization of rural areas. From viewpoint of the concept of Wellness, the authors focused on the possibility of the revitalization of rural areas through a gastronomy walking and carried out a survey at Gastronomy walking event in Barr (Alsace, France) and Yurihama town (Tottori, Japan). The results showed that the participants' motivation for participating was to deepen their relationship with friends and family, and that they valued eating, drinking, and landscape as factors that promoted interaction between participants.

研究分野：観光経営学

キーワード：ガストロノミーツーリズム ウエルネス ガストロノミーウォーキング 地域活性化

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ガストロノミーツーリズムは、単に料理やその飲食経験にとどまらず、食材生産の場も対象とする幅広い観光であることから、特に地方の農山漁村の活性化にとっても重要な役割を果たすと注目されている。とくにフランスでは、ガストロノミーウォーキングにみられるように、食の現場を健康的な運動と結びつけた観光が活発に展開されている。研究代表は、このような観光はガストロノミーにとどまらず、より幅広いウエルネス (= 多様な観点における健康に基づく豊かな人生と自己実現) の概念から理解されると考えた。また、ウォーキングによって「点」から「面」の観光が可能となることから、コミュニティとしての取り組みや景観保全も含む総合的な地域づくりとして日本の農山村でも応用しようと考えた。

### 2. 研究の目的

イベントを支える地域の人々と参加する人々の意識およびイベントの理念的な背景をウエルネスの概念から明らかにすることを目的とする。さらに、最終的にそれらの知見に基づいて、日本の農山村に应用可能なガストロノミーウォーキングの要件を抽出することを目指す。

### 3. 研究の方法

フランスのアルザス地方のガストロノミーウォーキングを対象として、イベントの運営組織と運営の状況を調査し、イベントを通じて人々が目指す地域の在り方について社会・文化・環境等の側面から分析する。

### 4. 研究成果

事例調査：アルザス州バル村のガストロノミーウォーキング

#### (1) 現地調査の概要

##### 第1回現地調査 (2022年9月2日~8日)

目的	イベントの全体像と現状の把握
調査対象	運営団体、協力ワイナリー、およびイベント参加者
調査手法	インタビュー調査
調査内容	運営団体：イベントの経緯と運営実態 協力ワイナリー：イベントとの関わり 参加者：参加地域及び参加の動機

##### 第2回現地調査 (2023年9月3日~6日)

目的	参加者の実態と関係者の意識の把握、および地域の観光振興との関係の把握
調査対象	観光局、協力ワイナリー、およびイベント参加者
調査手法	インタビュー調査およびアンケート調査
調査内容	観光局：イベントとの関わり方と地域の観光プロモーション 協力ワイナリー：イベントとの関わり 参加者：地域及び参加の動機、およびウエルネス意識の度合い

#### (2) 調査結果

##### 運営団体へのインタビュー (第1回調査)

運営団体グローブ・トロッター・ド・バル (Globe Trotter de Barr) の事務局長ベルナル氏のインタビューを行った。結果の概要は以下の通りである。

- ・ 今回 (2022年) の参加者1290名の大部分は、アルザスおよび周辺の地域からの参加。個人や家族・友人同士が中心で、団体参加は以下の3種類のみ：旅行会社の企画ツアー、サッカーチームのサポーター、企業の職員旅行。
- ・ 初回 (2003年) の参加者は約170名だったが、3年目には1000名超に急増。その後は運営力の限界と満足度維持のために約900~1200名前後におさえている。リピーターは凡そ4割強程度。
- ・ ルートは、住民が『景色の良いところ』をポイントとして決定した。
- ・ 当初、食事は地元店が提供していたが、閉店もあり、今回は近隣の村から調達した。
- ・ ワインは地域のワイナリー6社から300本ずつを買い取り、提供している。
- ・ 独立運営で村の補助金はなく、場所の提供・テントの貸与などのみ。資金は、企業協賛11社 (1社200€/年) の他は参加料収入 (参加費35€) のみ。募集は、SNSの他、チラシ、ポスター、パンフレットを協賛企業経由で配布している。

##### 協力ワイナリーへのインタビュー (第1回、第2回調査)

協力ワイナリー6社のうち、ライブ・ライニンガー (Leipp-Leininger : ジルベール・ライニンガー氏) (第1回調査) とドメヌ・ストフラー (Domaine Vincent Stoeffler : アドリアン・ストフラー氏) (第2回調査) にインタビューを行った。概要は以下の通りである。

- ・ 協力の目的は、一つはワイナリーのPRや情報提供、もう一つは村の活性化への貢献であり、直接的な経済メリットはほとんどない。
- ・ 提供するワイン300本はグローブ・トロッターが2割引きで買い取り。参加者がイベント後に

買って帰るといった形にはなっていない。

- ・参加者がウォーキング中にワインを飲むときは、作り手ではなくどのブドウで造られているかを考えている。運営側も作り手についてあまり意識していないのではないかと。
- ・ブドウ畑の景観は重要で、許可制ではないが取って変えようとする人はいない。ブドウ畑に新しい建物を建てることについては許可制であり、美的な観点から村が判断することになっている。

#### パール村観光局へのインタビュー（第2回調査）

局長のセリーヌ・ナルシス氏にインタビューを行い、ガストロノミーウォーキングとの関係について、以下の結果を得た。

- ・ガストロノミーウォーキングについては、PRおよびチケット販売やテント・テーブルの貸与のみで、企画・運営には関与していない。ガストロノミーウォーキング自体は、アルザス各地で数多く行われているが、ほとんどが何らかの協会やサークルなど住民団体の運営である。

#### 参加者へのヒアリング（第1回、第2回調査）

参加理由と満足したポイントについて、参加者のヒアリング結果は（表-1）の通りであった。

#### 参加者アンケート調査（第2回調査）

表-1 参加者ヒアリングの結果（要約）

対象	参加理由・満足ポイント
女性（50代・友人と参加）	・美味しいワインと食事、そして素晴らしい景観を満喫できるから ・美味しいワイン、食事、景観
女性（50代・友人と参加）	・自然が好きで、開放感を味わいたいから。 ・美味しいワインと食事、美しい景観と自然のなかでのリラックス、いろいろな人との出会い・交流、友人とのつながりの実感
家族連れ（両親・息子・娘）	・ワインと美味しい食事が好き ・美味しいワインと食事、素晴らしい景観、ストレス発散
女性（40代・職場仲間と参加）	・仲間とのきずなを深めるため ・仲間との親交、リラックス、美味しい食べ物
女性（40代・友人7名と参加）	・楽しく飲んだり食べたりしながら交流を深めること ・美味しいワインと食事、交流が深まった
男性（50代・会社仲間と参加）	・美味しいワインを飲んで交流を深めるため ・美しい眺め、美味しいワイン、仲間との交流
家族（両親・息子・彼女）	・家族のきずなを深めるため ・美しい風景、美味しいワイン、家族のきずなが深まった
女性（40代・夫と友人と参加）	・都市にはない美しい自然景観を体感するため ・友人や家族との絆の深まり、新しい出会い

参加者の動機とウェルネス意識を把握するため、出発地点でアンケート調査を実施した。その結果の概要は以下の通りである。

今回の参加者は1335名であり、そのうちアンケートは34名の回答があった。回答者の性別は男性18名、女性16名、年齢は10歳代1名、20歳代4

名、30歳代10名、40歳代8名、50歳代6名、60歳以上5名であり、30歳代から40歳代の回答が約半数を占める一方で、50歳代以上の回答も多い。また居住地は、ストラスブール10名、アルザス地方が5名、その他の地域が19名であり、半数以上が地域外からの参加であった。

参加回数をみると、1回20名、2回5名、3回6名、4回以上が3名ということで、約6割が初参加である一方で、残り4割が複数回参加であった。これは運営団体の事務局長のインタビュー結果と一致している。

リピーターの参加理由（複数回答）をみると、「ワインが飲めるから」が最も多く（24%）、次いで「知人友人との交流が深まるから」（22%）、「景観が良いから」（17%）、「よい運動になるから」（14%）、「食事が美味しいから」（13%）、「地元の人や他の参加者との出会いがあるから」（10%）であった。一方で「知人友人との交流」と「地元民や他の参加者との出会い」を合わせると32%に達することから、他者との関係づくりが最も多いということもできる。

#### 事例調査：ONSEN・ガストロノミーウォーキング in 湯梨浜

##### (1)調査の概要

現地調査（2023年9月23日）

目的	参加者の実態と関係者の意識の把握、および観光振興・地域づくりとの関係の把握
調査対象	実行委員会事務局（NPO法人未来）およびイベント参加者
調査手法	ヒアリング調査およびアンケート調査
調査内容	関係者：イベントに対する意識 参加者：出身地、参加動機、およびウェルネス意識の度合い

インタビュー調査（2023年10月11日実施）

目的	運営組織および運営実態
調査対象	町役場、NPO法人未来
調査手法	インタビュー調査
調査内容	町役場：支援内容およびイベントとの関わり方 NPO：運営体制

(2)参加者へのアンケート調査結果

ウォーキング終了後、実行委員会の協力を得てアンケート調査を実施した。その結果の概要は以下の通りである。

今回の参加者は182名であり、そのうちアンケートは167名の回答があった。回答者の性別は男性66名、女性101名、年齢は10歳代5名、20歳代17名、30歳代18名、40歳代23名、50歳代48名、60歳以上46名、70歳以上10名であり、年代別では50代、次いで60歳代半数を超え、50歳代女性が37名と多かった。また居住地は、湯梨浜町36名、鳥取市26名、倉吉市21名、米子市10名、岡山県14名、兵庫県11名、香川県8名、東京都5名、その他の地域が14名であり、鳥取県内93名、74名が地域外からの参加であった。

回答者の参加回数をみると、1回90名、2回22名、3回22名、4回13名、5回以上が20名ということで、約5割が初参加である一方で、残り5割が複数回参加であった。

また、楽しむことができたもの（複数回答）をみると、「自然」が最も多く（35%）、次いで「食事」（30%）、「お酒」（12%）、「参加者同士の交流」（12%）、「地元の方との交流」（8%）であった（図-3）。「参加者同士の交流」と「地元の方との交流」を合わせると20%に達することから、他者との関係づくりに対する満足度も高いということもできる。

一方で、自由記述欄では、食事への不満：ラーメンがぬるかった、焼肉は焼きあがるのが遅くて待ちきれず諦めた等、説明の要改善：各スポットで簡単なガイドがあれば良かった等、交通アクセスの不満：お酒を飲むイベントなのに公共交通機関が不便で移動に苦労した等、景観の要改善：出雲山展望台あとの歩道の落葉と雑草がひどかったのが少し残念等、と言った不満や改善点の指摘がみられた。

(3)運営団体へのヒアリング

イベントの運営は実行委員会制度を取っており、事務局を担当しているNPO法人未来にイベントの運営についてヒアリングを行った。その結果は以下の通りである。

- ・同法人はJML（日本マーチングリーグ）に加盟しており、「SUN-IN 未来ウォーク」など2023年度も8か所で主催ウォーキングを展開している。その他にまちづくり事業（市民団体の支援、中心市街地活性化事業、地域資源情報の発掘・加工・発信など）、福祉・教育・文化事業を実施している。主な収入は会員企業・個人の会費である。
- ・ONSEN・ガストロノミーウォーキング in 湯梨浜では、コース設計及びフードポイントの提案だけでなく、スタッフ人員の確保やフードポイントにあるcafé ippoの運営を行っている。2023年度はコロナ禍明けの久々のイベントとなり、酒類醸造家招聘を企画したが、調整がつかなかった。
- ・今回の運営費は、鳥取県および湯梨浜町からの補助金が約75%で、参加費収入が約25%であった。
- ・当日スタッフ64名は、ほとんどが実行委員会からの応援によるもので、その他に地域団体から有償ボランティアの参加があった。受付地点からスタート地点までの移動は、町からマイクロバス（運転者込み）の貸与を受けて行われた。

ウェルネスの視点からみた参加者の意識の比較検討

2つのイベントで実施した参加者のウェルネス意識に関するアンケート調査の結果をもとに、両イベント間の参加者のウェルネス意識の特徴について比較を行った（表-3）。

表-3 参加者ウェルネスアンケートの比較

		湯梨浜町	アルザス	t 値/p
食事への関心	M	4.19	4.3	63
	SD	0.95	0.7	0.53
情緒への安定	M	4.93	4.83	0.73
	SD	0.76	0.5	0.46
社会への貢献	M	4.34	4.26	0.42
	SD	0.9	0.62	0.67
運動への意識	M	4.03	3.43	2.15
	SD	1.23	1.33	0.03※

※p<0.05

野崎(1997)が作成したウェルネスチェックテストには、「『現在の食事に関する知識や行動』、『身体活動に関する知識や行動』、『ストレスコントロールに関して』、『人間関係の実情』、『自然環境に関する態度』、『自分の人生の充実度や人生の目的などについて』」の項目があり、現在の

ライフスタイル全般にわたって確認することが出来る。このテストは、30の質問からなり、「運動を楽しむ」、「楽しく食べる」、「自分についての注意」、「生活を楽しむ」、「他者との関係」、「世界の一員であること」の6つの項目（質問は各項目5つずつ）に分類されている。質問項目に対しての回答は、「6：いつも」、「5：よく」、「4：ときどき」、「3：たまに」、「2：ほとんどない」、「1：まったくない」の6段階である<sup>1)</sup>。

野崎（1997）のウエルネスモデルは、「情緒」（ストレスコントロール）、「精神」（人生観・生きがい）、「身体」（運動・栄養）、「環境」（社会・自然）の4領域と、これらの領域に関する知識と認識が深まり、気づきが起こって、行動へと進む「価値」の領域の5領域から説明されている。そこで、「価値」以外の4領域とウエルネスチェックテストの6項目を当てはめてみると、「情緒」の領域には「生活を楽しむ」、「精神」の領域には「自分についての注意」および「楽しく食べる」、「身体」の領域には「運動を楽しむ」、「環境」の領域には「他者との関係」および「世界の一員であること」がそれぞれ対応しているといえる。

ウエルネスチェックシートは、これまで、ウエルネスレベルを高めるために有効なテストとされてきた。しかしながら、ウエルネスチェックシートそのものの因子構造についての検討はされてこなかった。この点について田中（2015）らは、6項目、30の質問項目からなるウエルネスチェックテストを因子分析し、4因子、16の質問項目となる構造を明らかにした<sup>2)</sup>。

田中らの研究で明らかになったこれらの4因子を野崎のウエルネス5領域に当てはめてみると、「食事への意識」と「運動への意識」は「身体」に、「情緒の安定」は「情緒」、「社会への貢献」は「環境」に当てはまる。

上記の理解に基づいて、本研究においてウエルネスチェックテストを使用することとし、フランスパール村の「ガストロノミーウォーキング（2023年9月3日）」とフランスパール村をモデルとした「ONSEN・ガストロノミーウォーキング in 湯梨浜（2023年9月23日）」の参加者を対象として調査・比較を行った。

各調査対象の因子ごとの合計得点から、各因子の平均値と標準偏差を算出したのち、平均値の差の検定を行った。その結果、ONSEN・ガストロノミーウォーキング in 湯梨浜の参加者の方が、運動への意識が高いことが分かった（ $p < 0.05$ ）。

#### ○結果の処理

抽出された因子による調査地間差の検討

抽出された因子をもとに、差の検討するために調査地間でt検定（Welch）を行った。危険率5%未満（ $p < 0.05$ ）を有意水準とした。

統計処理

統計処理に当たっては、エクセル統計を使用した。で表記する。

#### まとめ・考察

今回の現地調査と分析から、日本の農山漁村地域においてガストロノミーウォーキングを通じた観光地域づくりを進めるうえで注意すべき視点を見出すことができた。

第一に、どちらの事例でも、イベントの舞台となった地域の自然や景観に対する満足度は高かった。ガストロノミーウォーキングでは、歩くことは単なる健康のための運動ではなく、地域の魅力に触れ、豊かな食を生み出す風土を楽しむことに価値がある。したがって、イベントで提供する食事にこだわるだけでなく、日ごろから地域の景観づくりに力を入れることが大切である。

第二に、パール村のフードポイントではふんだんに飲料も食料もあったが、湯梨浜のフードポイントでは全体的に量が不足しているという指摘も多く、全体の満足度の低下につながってしまった。「ガストロノミー」のイベントとして、「試食・試飲」というスタンスではなく、参加者が十分に満足することを最優先して、地域の特産・郷土料理の提供プランを組み立てる必要がある。そのためには、地域性の高いメニューの提供とそれに見合った参加費の設定を十分に検討することが求められる。

第三に、地域活性化につなげるためには、一部の住民団体だけではなく、地域全体を巻き込んだ協力体制が必要である。今回の調査で明らかになったように、ガストロノミーウォーキングは、飲食を楽しむだけではなく、ウォーキングで地域を見て回り、参加者や住民と交流することで、身体的な健康だけではなく、精神的・社会的にもウエルネス意識を満たすことができるイベントである。その効果を十分に高めるためには、参加者だけでなく、地域の住民も健康で豊かな暮らしを享受できる地域づくりを目指す意識を持つことが必要であろう。

#### 【引用・参考文献】

1) 野崎康明（1997）：ウエルネスの理論と実践，丸善メイツ，pp.83-86

2) 田中伸明・水村信二（2015）：大学初年次生を対象にしたウエルネスチェックテストの因子構造について，ウエルネスジャーナル，11（1），pp.3-8

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 西村 典芳、高根沢 均、傍嶋 則之	4. 巻 4
2. 論文標題 フランス・アルザス地方のガストロノミーウォーキング調査報告	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 観光マネジメント・レビュー	6. 最初と最後の頁 63～69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50984/jptmrvone.4.0_63	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西村 典芳
2. 発表標題 フランス・アルザス地方のガストロノミーウォーキング調査報告
3. 学会等名 日本観光経営学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西村典芳
2. 発表標題 神戸ワイナリーガストロノミーウォーキング調査報告
3. 学会等名 日本観光経営学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中 祥司、福本 賢太編著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 199
3. 書名 観光ビジネスの新展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高根沢 均  (TAKANEZAWA Hitoshi)  (10454779)	関西国際大学・現代社会学部・准教授   (34526)	
研究分担者	傍嶋 則之  (SOBAJIMA Noriyuki)  (30779509)	名古屋産業大学・現代ビジネス学部・教授   (34526)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------